

2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふりがな 氏名	かいばら あきお 貝原 哲生
(研究テーマ名) ビザンツ～初期イスラーム時代エジプトにおける教会の社会的役割	
(研究活動実績) <p>ビザンツ統治期からアラブ・イスラーム時代初期のエジプトにおける教会の社会的役割について考察した。対象地域としては、史料の蓄積状況が良好であるうえ、使用言語において好対照をなすことから、中部エジプト（ギリシア語・コプト語併用圏）のアフロディトと上エジプト（コプト語圏）のジューメを中心に扱った。アフロディトとジューメはともに都市ではないが、数千規模の人口を抱える大型集落である。</p> <p>古代末期エジプト研究の大家バグナル R. S. Bagnall は、4 および 5 世紀を射程とする研究の中で、村落を統率していたのは教会だと主張する。彼によれば、元々、エジプトの地域社会は古代宗教の神殿を中心に構成されていた。しかし、3 世紀に古代宗教が衰退すると、農村共同体もまた舵と船長を欠いた船のごとく崩壊した。そのような状況下で爆発的に普及し、4 世紀以降、神殿になり代わって農村共同体を再構築し、その中核となったのがキリスト教会だという。</p> <p>実際、アフロディトでは、教会が社会の中心にあった。たとえば、同村からユスティニアヌス 1 世の皇妃テオドラへ宛てられた嘆願書では、署名者のうち 1～10 番手までが聖職者で占められており、教会人の社会的地位の高さを示唆する。</p> <p>他方、テーバイでは、7 世紀にいたってもキリスト教的価値観自体が浸透途上で、そのうえ俗人在地有力者層の社会的地位が強固であったため、教会権力拡大の余地は限られていた。また教会人自身も、神との対話を重視し、富と権力の拡大には消極的であった。</p> <p>これらの研究成果の一部を、第 14 回古代・東方キリスト教研究会（8 月 29 日、於・国立民族学博物館）にて『7 世紀エジプトにおける教会と社会 - テーバイを例として - 』という表題で行った。</p>	